

第9回
観峰館オンライン講座
観峰館所蔵品を鑑賞しよう
(4)
辻本史邑・臨書帖「屏風土代」
について

2021年7月25日（日）14時00分～
講師；寺前公基（観峰館学芸員）

◇講座の目的◇

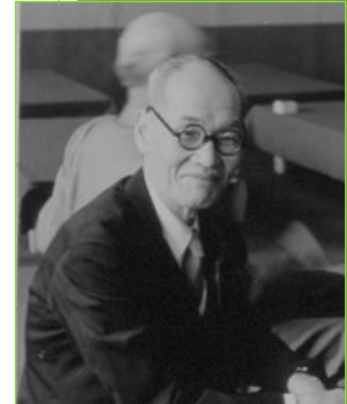
- ・ 第8回に引き続き、臨書作品の鑑賞
- ・ 「臨書」について考える
- ・ 肉筆（手書き）作品の、さまざまな臨書

辻本史邑 (つじもと しゅう) とは？

明治28年 (1895) ~ 昭和32年 (1957)

大正~昭和時代の書家。奈良県出身。本名は勝己 (かつみ) で、別の号として寧楽庵主人 (ねいらくあんしゅうじん)、江村 (ごうそん) などを持つ。

書は、近藤雪竹 (こんどう せっちく)、中村春堂 (なかむら しゅんどう) らに学ぶ。雑誌「書鑑」を創刊する。東方書道会という書道団体に属し、戦後は日本書芸院のリーダーとして関西の書道界の発展につくした。昭和32年62歳で死去。



辻本史邑 筆

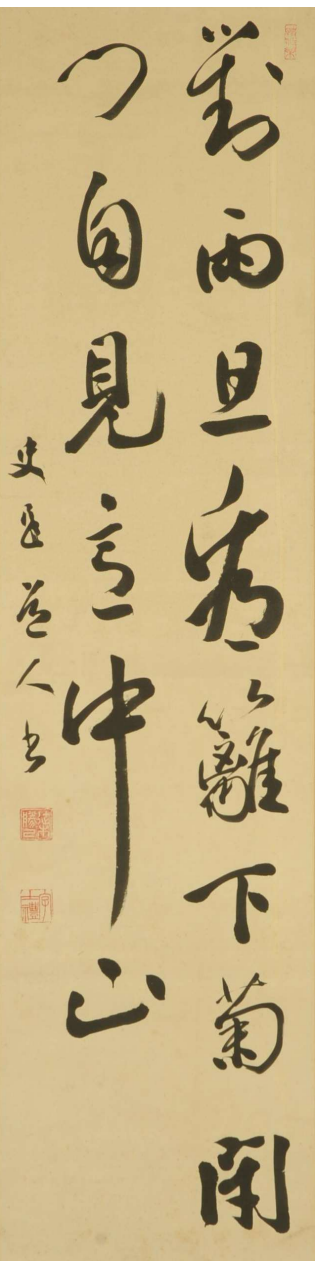
「行書七言対句軸」

昭和中期頃

対雨且看籬下菊閉

門自見意中山

史邑道人書



対雨且看籬下菊

(雨の中しばらく、籬の下にさく菊を見る)

閉門自見意中山

(門を閉じ、自ら心の中にある山を思い浮かべる)

屏風土代 (びょうぶどだい) とは？

三蹟 (さんせき) の一人、**小野道風** (おのの とうふう、894~967) が書いた屏風の下書き (これを土代という)。延長6年 (928)、道風35歳の作である。東京・三の丸尚蔵館所蔵。

全21枚の色紙形の料紙に、**大江朝綱** (おおえ あさつな) の漢詩11首を書いている。現在は、卷子 (かんす、巻物のこと) 装である。

下書きであるためか、所々に小さな文字で傍書 (ぼうしょ) しているのは、文字の訂正や書体の工夫に余念 (よねん) がなかったためである。その書は、優雅で伸びやかな行草書体である。

それでは、
実際の作品を見て
みましょう！



小野道風筆

屏風土代

延長六年（九二六）作



小野道風筆

屏風土代

延長六年（九二六）作



屏風に和歌色紙を貼り付けた一例



観峰館所蔵「新百人一首色紙貼付屏風」江戸中期～後期作

小野道風 筆

屏風土代

延長六年（九二六）作

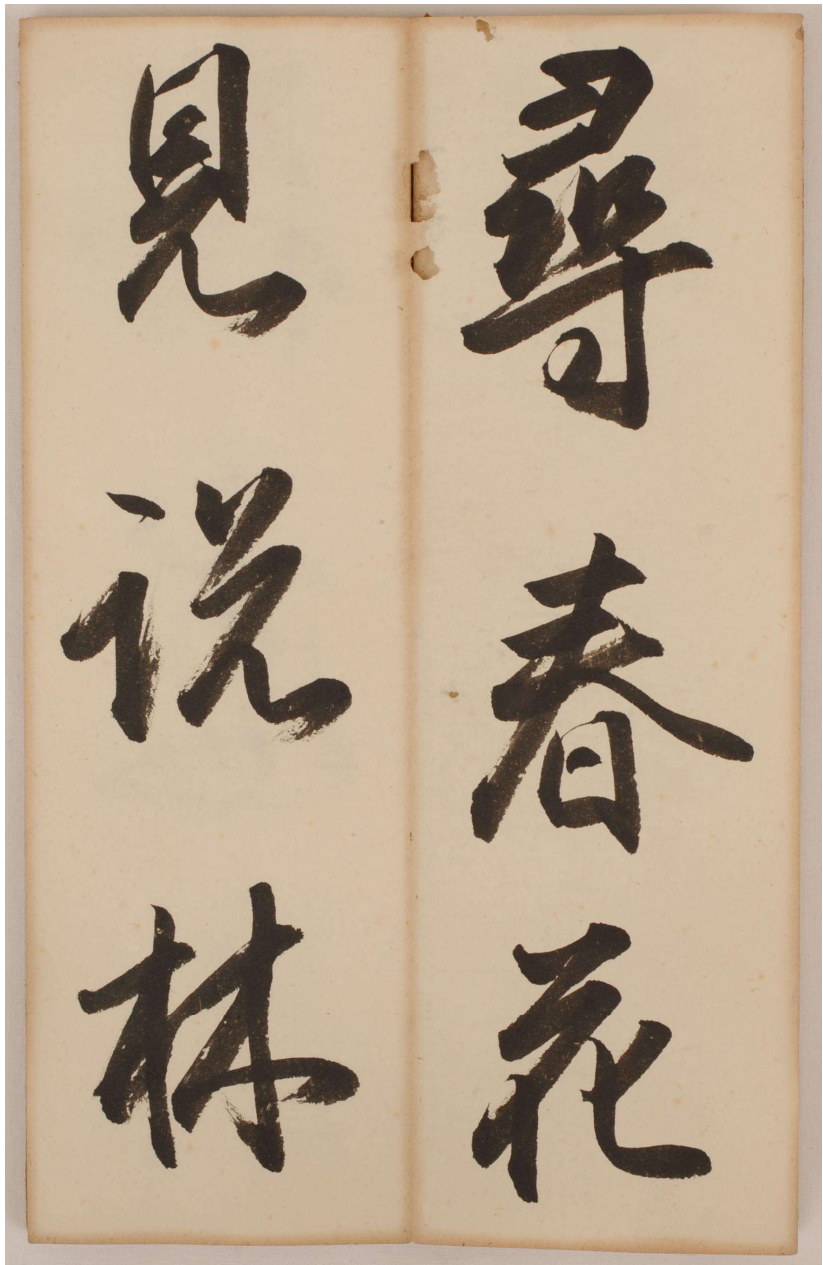


下書きらしく、書の濃淡がはっきりとした部分がある。これにより、作者の墨継ぎのタイミングがよく分かる。

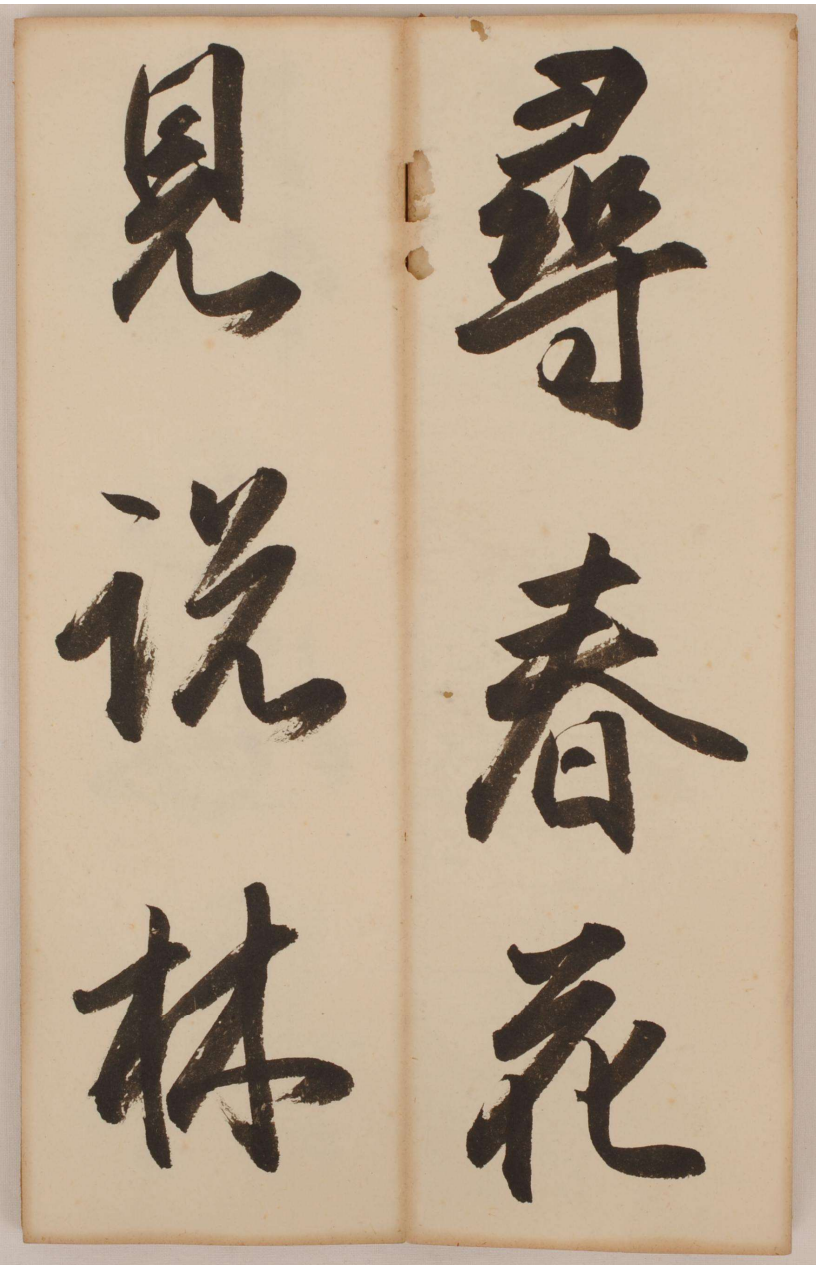
第8回の臨書と異なる部分

それは、

肉筆の作品を臨書すること

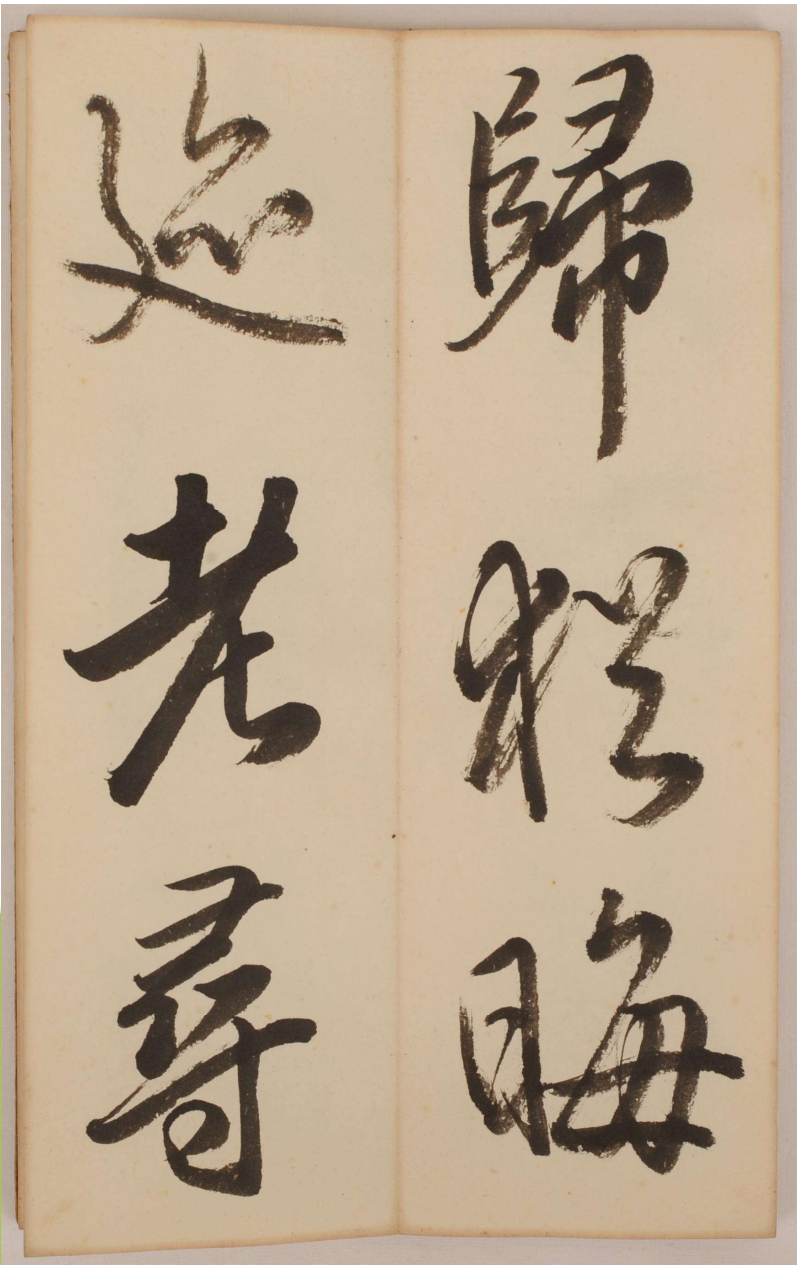


辻本史邑 筆
臨書帖「屏風土代」
昭和二十年代



(右) 小野道風筆 (オリジナル)

(左) 辻本史邑筆 (臨書)



(右) 小野道風筆 (オリジナル)

(左) 辻本史邑筆 (臨書)

臨書って何でしょう？

臨摸 (りんぼ) について

宋代の著名な画家米芾（べいふつ）は、「画は臨すべく摸すべし」と述べている。彼は「臨」と「摸」を2種類の技術方法として分けて解釈している。

「摸」とは外に現れる効果であり「臨」は**絵画の勢いや筆致の品格を理解することが求められる**のである。

「臨摸」＝摸写は、一幅の絵を“形”から、その“心”にいたるまで、すべて忠実に再現することを追求するものなのである。

常書鴻『敦煌の守護神 常書鴻自伝』（2005年、日本放送出版協会）より



(上) 屏風土代 原本

(下) 伏見天皇 臨書

An abstract background on the right side of the page, composed of overlapping, semi-transparent green triangles and polygons in various shades of green, ranging from light lime to dark forest green. The shapes are layered, creating a sense of depth and movement.

(上) 屏風土代 原本

(下) 近衛家瀨 臨書

今日の講座のおさらい

ありがとうございました！

来月の講座予定

- 8/17 (火) 観峰館の臨書作品 (3)
－孫過庭「書譜」の言葉と形－
- 8/25 (水) ちょっと本格的な
掛軸の保存と修理 演習 シリーズ①

観峰館